様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　27 日現在

研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2006～2010
課題番号：18201046
研究課題名（和文）　アフリカ熱帯林における人間活動と環境改変の生態史的研究

研究課題名（英文）　Ecological History of Human Activities and Environmental Change in African Tropical Forest

研究代表者
木村 大治（KIMURA DAIJI）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：40242573

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，人類が熱帯林の中に棲まうことの多様性と意味を，情報的,社会的環境をも視野に入れた広義の生態学視点に立って明らかにしていくことである。これまで京都大学を中心とする日本の研究者が長期にわたって調査をおこなってきたカメルーン東南部の熱帯林を中心に，「生態環境」「情報環境」「社会環境」の 3 つの軸に沿って研究を遂行した。この地域にはピグミー系狩猟採集民と，バントゥー系農耕民が居住しているが，両者の熱帯林環境での「棲まい方」は「共存」か「改変・開拓」かという形でおおきく異なっていた。本研究で得られた知見は，21 世紀に人類が地球上で「棲まう」やり方について重要なヒントを与えるものだと考える。具体的な知見は，研究終了時に刊行した「森棲みの生態誌」「森棲みの社会誌」の 2 冊の論文集にまとめた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the diversity and meaning of the human dwelling pattern in the tropical rain forest, from the viewpoint of ecology in the broader sense, including informational and sociological aspects. So far, Japanese researchers center on Kyoto University have been conducting long-term research in African rain forests, especially in South-East Cameroon. In this study we carried out the research mainly in this area, along the following 3 axes: “ecological environment”, “informational environment”, and “social environment.” There live “Pygmy” hunter-gatherers and Bantu farmers in this area, and the way of dwelling of these two groups so much differ. I.e. Pygmies live coexistent with the forest, but farmers change and exploit the forest, on the contrary. These ways of dwelling will provide some light on how the humans dwell on this planet in 21st century. The results of this study were collected up in the two books: “People, Nature and History of African Tropical Forests I: From Ecological Perspectives,” and “People, Nature and History of African Tropical Forests II: From Sociological Perspectives” published in 2010.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2007 年度	8,600,000	2,580,000	11,180,000
2008 年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
2009 年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
年度			
総　計	28,700,000	8,610,000	37,310,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：生態誌，アフリカ，熱帯林，環境改変，人間活動，生態環境，情報環境，社会環境

１．研究開始当初の背景
研究代表者(木村)は，これまでのアフリカ熱帯林における研究の過程で，土地の人々が居住地の微環境を改変し，いわば「新たな生態環境を創出している」という事例を数多く観察してきた。しかしそういった知見が，生態学的な見地から統合的に議論されることはなかった。

２．研究の目的
本研究の目的は，人類が熱帯林の中に入り，そこに住まうとき，どのようなやり方でそれをおこなっているのか。その多様性と意味を，情報的，社会的環境をも視野に入れた広義の生態学視点に立って明らかにしていくことである。具体的には，これまで京都大学を中心とする日本の研究者が長期にわたって調査をおこなってきたカメルーン東南部の熱帯林を中心に，そこに住む狩猟採集民と農耕民の比較を中心に，「生態環境」「情報環境」「社会環境」の３つの軸に沿って，上記の視点からの調査をおこなっていく。

３．研究の方法
研究は，これまで研究代表者，分担者たちが約20年間にわたって調査を続けてきた カメルーン東南部熱帯林，および最近になってふたたび調査が可能になったコンゴ民主共和国においておこなった。調査は，カメルーンにおいては京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科が運営してきたフィールドステーション，コンゴにおいてはボノボの調査基地をベースにした。具体的には，一般的な参与観察，聞き取りに加えて，自動記録気象計設置，畑や狩猟活動の位置の GPS 計測，タイム･アロケーション調査(他の科研費隊と協力しておこなう)，現地の人々の食物の記録と分析，情報環境としての会話や歌と踊りの分析，農耕民と狩猟採集民，および外部アクターの社会関係の分析などをおこなってきた。

４．研究成果
研究成果については，数ヵ月に一度，「中部アフリカ研究会」などの研究会を開催して相互に討論をおこなった。またそれらを通じて，若手の研究者の育成に努力してきた。
そこで練り上げられた成果を世に問うため，2010 年 3 月に，下に記す二つの論文集を刊行した。本研究のひとつの中心的課題は，アフリカ熱帯林に住むピグミーと呼ばれる狩猟採集民たちと，バントゥー系農耕民の，森の環境の中への「住まい方」の違いを明らかにすることであったが，この 2 冊の論文集の中で，生態環境，情報環境，社会環境それぞれの側面における，その違いを明らかにすることができたと考える。すなわち，狩猟採集民たちは熱帯林に「包まれ，それらを感じて生きる」という構えを持つのに対し，農耕民たちはそれを「開き，使う」という構えを持つということである。しかし農耕民においてもやはり，自分たちの住み場所は森であるという意識は明確に持っているのである。
これらの情報は，カメルーン・フィールドステーション・ホームページを充実させることによって積極的に社会に発信するよう努めている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 27 件）
2010 年 3 月に本研究の総まとめとして，下記の 2 冊の論文集を刊行した。これらに掲載された論文は，図書としてまとめて記載すると個々の情報が失われてしまうため，雑誌論文に準じて個別に記しておく。なお，これらの論文はすべて，編集委員会の査読を経て掲載されたものである。

木村大治，北西功一（編著）2010『森棲みの生態誌 －アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』xvi+425pp. 京都大学学術出版会
木村大治，北西功一（編著）2010『森棲みの社会誌 －アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 II』xiii+388pp. 京都大学学術出版会

『森棲みの生態誌』掲載論文
(1) 市川光雄 2010「アフリカ熱帯雨林の歴史生態学に向けて」pp.3-15
(2) 小松かおり 2010「中部アフリカ熱帯雨林の農耕文化史」pp.41-58
(3) 北西功一 2010「アフリカ熱帯雨林とグローバリゼーション」pp.59-76
(4) 市川光雄 2010「植生からみる生態史 ―イトゥリの森―」pp.101-118

(5) 寺嶋秀明 2010「森が生んだ言葉 ―イトゥリのピグミーにおける動植物の名前と属性についての比較研究―」pp.165-189
(6) 小松かおり 2010「森と人が生み出す生物多様性 ―カメルーン熱帯雨林の焼畑・混作畑―」pp.221-242
(7) 木村大治，安岡宏和，古市剛史 2010「コンゴ民主共和国・ワンバにおけるタンパク質獲得活動の変遷」pp.333-351

『森棲みの社会誌』掲載論文
(8) 小松かおり 2010「アフリカ熱帯林の社会（1）― 中部アフリカ農耕民の社会と近現代史―」pp.3-20
(9) 北西功一 2010「アフリカ熱帯林の社会（2）― ピグミーと農耕民の関係―」pp.21-46
(10) 分藤大翼 2010「アフリカ熱帯林における宗教と音楽」pp.55-65
(11) 木村大治 2010「農耕民と狩猟採集民における相互行為研究」pp.67-73
(12) 木村大治 2010「バカ・ピグミーは日常会話で何を語っているか」pp.239-261
(13) 北西功一 2010「所有者とシェアリング― アカにおける食物分配から考える―」pp.263-279

(14) 木村大治 2010「『Co-act』と『切断』--- バカ・ピグミーとボンガンドにおける行為接続」(木村大治, 中村美知夫, 高梨克也 編)『インタラクションの境界と接続 ―サル・人・会話研究から』pp.231-252 昭和堂 査読有
(15) 木村大治 2010 「インタラクションを捉えるということ」『可能性としての文化情報リテラシー』(岡田浩樹，定延利之編) pp.97-110 ひつじ書房 査読無
(16) 小松かおり 2009「バナナの商品化と品種多様性 ―インドネシア・南スラウェシの事例から」『国立民族学博物館調査報告』84 査読有
(17) Lingomo B. and D. Kimura 2009 "Taboo of eating bonobo among the Bongando people in the Wamba region, Democratic Republic of Congo" *African Study Monographs* 30-4:209-225 査読有
(18) Yamamoto, S., G. Yamakoshi, T. Humle & T. Matsuzawa 2008 "Invention and modification of a new tool use behavior: Ant-fishing in trees by a wild chimpanzee (*Pan troglodytes verus*) at Bossou, Guinea" *American Journal of Primatology* 70(7):699-702 査読有
(19) 山越言 2008「生物多様性を理解するとはどういうことか―研究とフィールドのはざまで」『エコソフィア』29:66-79 査読有
(20) 寺嶋秀明 2008「伊谷純一郎の「人間平等起原論」をめぐって」『人間文化』23:1-12
(21) Araki, S. 2007 "Ten years of population change and the chitemene slash-and-burn system around the Mpika area, northern Zambia" *African Study Monographs, Supplimentary Issue* 34:75-89 査読有
(22) Tashiro, Y., G. Idani, D. Kimura & L. Bongoli 2007 "Habitat Changes and Decreases in the Bonobo Population in Wamba, Democratic Republic of the Congo" *African Study Monographs* 28(2):99-106 査読有
(23) 分藤大翼 2007「ポスト狩猟採集社会の文化変容―仮面儀礼の受容と転用―」『アジア・アフリカ地域研究』6(2):489-506 査読有
(24) 木村大治 2006「平等性と対等性をめぐる素描」『人間文化』 21:40-43 査読有
(25) 木村大治 2006「生態人類学・体力・探検的態度」『アフリカ研究』69:91-100 査読有
(26) 小松かおり，北西功一，丸尾聡，塙狼星 2006「バナナ栽培文化のアジア・アフリカ地域間比較－品種多様性をめぐって－」『アジア・アフリカ地域研究』6-1:77-119 査読有
(27) Kitanishi, K. 2006 "The impact of cash and commoditization on the Baka hunter-gatherer society in southern Cameroon" *African Study Monographs, Supplementary Issue* 33:212-142 査読有

〔学会発表〕（計 7 件）
(1) Kimura, D. “Everyday Conversation of the Baka Pygmies” International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers 2010 年 9 月 24 日 モンペリエ，フランス
(2) Ichikawa, M. “Historical Ecology and Contemporary Problems in the Congo Basin Hunter-gatherer Studies” International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers 2010 年 9 月 24 日 モンペリエ，フランス
(3)「ウガンダ共和国とコンゴ民主共和国における森林保護区周辺の地域住民による森林資源の利用の実態」(古市剛史, 安岡宏和, 木村大治，手塚賢至，橋本千絵）日本アフリカ学会第 47 回学術大会 2010 年 5 月 30 日 奈良県文化会館
(4) 木村大治 「コンゴ民主共和国ワンバにおけるティラピア養殖と小家畜飼養の試み」日本アフリカ学会第 45 回学術大会 2008 年 5 月 24 日 京都(龍谷大学)

(5) 分藤大翼「森の民の 30 年－狩猟採集社会の研究史－」日本文化人類学会第 42 回研究大会 2008 年 5 月 31 日、 京都大学
(6) 分藤大翼 「Jengi（「映像フォーラム」にて上映発表）」日本アフリカ学会第 44 回学術大会 2007 年 5 月 26 日 長崎大学
(7) Kimura, D. “Diversity of human verbal interaction: Two cases from tropical Africa” 2006 年 11 月 19 日 Cradle of Language Conference ステレンボッシュ, 南アフリカ共和国

〔図書〕（計 6 件）
(1) 木村大治，北西功一（編著）2010『森棲みの生態誌 －アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』xvi+425pp. 京都大学学術出版会
(2) 木村大治，北西功一（編著）2010『森棲みの社会誌 －アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 II』xiii+388pp. 京都大学学術出版会
(3) 木村大治，中村美知夫，高梨克也（編著）2010『インタラクションの境界と接続 －サル・人・会話研究から』445pp. 昭和堂。
(4) 市川光雄 2008『ファースト・ピープルズ～世界先住民族の現在第 5 巻 サハラ以南アフリカ』(「ムブティ・ピグミー：森の民の生活とその変化」を執筆) 明石書店
(5) 市川光雄 2008『ヒトと動物の関係学』池谷和信・ 林良博編(「ブッシュミート問題—アフリカ熱帯雨林の新たな危機」を執筆) 岩波書店
(6) 小松かおり 2008『朝倉世界地理講座 －大地と人間の物語－ 12 アフリカ』池谷和信・武内 進一・佐藤廉也編(「バナナとキャッサバー赤道アフリカの主食史」を執筆) 朝倉書店

〔その他〕
ホームページ等
カメルーン・フィールドステーション
http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/cgi-bin/CameroonFS/wiki.cgi

６．研究組織
(1)研究代表者
木村 大治（KIMURA DAIJI）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：40242573
(2)研究分担者
市川 光雄（ICHIKAWA MITSUO）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・名誉教授
研究者番号：50115789
荒木 茂（ARAKI SHIGERU）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授
研究者番号：00158734
寺嶋 秀明（TERASHIMA HIDEAKI）
神戸学院大学・人文学部・教授
研究者番号：10135098
北西 功一（KITANISHI KOICHI）
山口大学・教育学部・准教授
研究者番号：80304468
小松 かおり（KOMATSU KAORI）
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号：30334949
山越 言（YAMAKOSHI GEN）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：00314253
分藤 大翼（BUNDO DAISUKE）
信州大学・全学教育機構・准教授
研究者番号：70397579